

カトリック円山教会、小樽教会 集会祭儀 教話  
2025年12月14日（日）待降節第3主日（待・A・紫）  
主任司祭 佐藤謙一

第一朗誦：イザヤの預言（イザヤ35・1-6a、10）；神は来て、あなたたちを救われる

答唱詩編：（詩編146・1+2+10a、6c+7、8ac+9bc）；いのちあるすべてのものは、神をたたえよ。

第二朗誦：使徒ヤコブの手紙（ヤコブ5・7-10）；心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからである

アーレルヤ唱：（イザヤ61・1）；神の例はわたしの上にある。貧しい人に福音を告げるため、神はわたしを選ばれた。

福音朗誦：マタイによる福音（マタイ11・2-11）；来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか

典礼の祈りというものは、わたしたちを神にささげるものであると言えます。ミサの中で神はわたしたちに近づき、わたしたちがささげようとしている祈りを神は受け取ろうとしているのです。葬儀ミサはその最たるものです。亡くなられた方を神にささげようとしているわたしたちの祈りとともに、神がわたしたちに近づき亡くなられた方を受け取ろうとしているのです。ですから共同体の祈りでは、いつも神が近づいてきてわたしたちの願いを聞き取ろうとしていると言えます。

今は待降節という季節ですが、この季節は特に神を待ち望む時です。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう」とイエスは預言者の言葉を引用して、洗礼者ヨハネこそが神への道を準備する者だと言っています。待降節に読まれる聖書は神が人間を解放するために人間に近づいたことを明らかにしています。目の見えない人、足の不自由な人、重い皮膚病を患っている人、耳の聞こえない人、死者、貧しい人がすべて解放されると書かれています。そういう人たちに神は近づいているのです。だからそれに気づきなさいと言われているのです。

現実に文字通りにそうなっている人というだけではなく、目の見えない人というのは神が近づいているのに見ようとしない人という意味もあるでしょう。足の不自由な人というのは神が来るよう訴えているのにその場所に足を運ぼうとしない人という意味もあるでしょう。また、耳の聞こえない人というのは神が呼び求めているのに聞こうとしない人という意味もあるでしょう。貧しい人というのはすべてを総合しての呼び方であると考えられますが、様々な事情で心が神に向かない人と言えるでしょう。もしかしたらこの世の中で神はないと嘆いている人とも考えられます。それで心が貧しい人がいるかもしれません。これらすべての人が苦しみの中にあって、本当は神が近づいていると気づくことができたらどんなに素晴らしいことでしょうか。福音はいつも告げ知らされています。これはイエスの使命であり、イエスがもたらしたものもあります。それをわたしたちが受け継いで告げ知らせていかなければなりません。

次にわたしたち自身のことも考えなければなりません。わたしたちも貧しい人になっていないかということです。現実の貧しさではなく、心の貧しい人になっていないかということです。飢え乾いていながら神のことばを聞いて、今自分ができることをどうすればいいのかわからない状態にある人になっていないかということです。

イエスの誕生はわたしたちにも救いの喜びをもたらすのです。イエスは生まれて飼い葉桶の中に置かれました。貧しい人々の代表として生まれました。イエスがおこなってきたことは単に病気のいやしだけではありません。わたしたちの心に、神に対する信頼と生きていく希望とお互いに愛することを植え付けさせました。待降節には特にそのような信仰・希望・愛をわたしたちにも もたらしてくださいと祈り求める必要があるのではないかと思います。

今日読まれた朗誦箇所はすべて苦しみの中にあっても救い主が必ず来る。だから喜びのうちに待ちなさいというものでした。主の降誕が近づいています。イエス・キリストがこの世にお生まれになったことを記念すると同時にその働きに感謝しながら、キリストの再臨を待ち望みましょう。